

「テモテ、パウロに同行する」

2016年07月04日

使徒言行録 16章 1節～5節。パウロは、デルベにもリストラにも行った。そこに、信者のユダヤ婦人の子で、ギリシア人を父親に持つ、テモテという弟子がいた。彼は、リストラとイコニオンの兄弟の間で評判の良い人であった。パウロは、このテモテと一緒に連れて行きたかったので、その地方に住むユダヤ人の手前、彼に割礼を授けた。父親がギリシア人であることを、皆が知っていたからである。彼らは方々の町を巡回して、エルサレムの使徒と長老たちが決めた規定を守るようにと、人々に伝えた。こうして、教会は信仰を強められ、日ごとに人数が増えていった。

アンティオキア教会から送り出され、パウロとシラスは陸路で、デルベ、リストラに行った。以前、リストラで宣教した時、クリスチャンになったユダヤ婦人の子で、ギリシア人を父に持つ、テモテという青年がいた。彼は真面目で、信仰深い青年であったので、リストラ、イコニオンの教会で評判が良かった。パウロは彼と出会い、確かな信仰の持ち主であることを見抜いた。そこで、宣教旅行と一緒に連れて行きたいと思った。テモテは父親がギリシア人であったので、割礼を受けていなかった。パウロは「その地方に住むユダヤ人の手前、彼に割礼を授けた」と、割礼を施したと書かれている。エルサレムの使徒会議において、異邦人に割礼を強要することはしないと決議した。パウロは、ガラテヤ書 5章 6節に「キリスト・イエスに結ばれていれば、割礼の有無は問題ではなく、愛の実践を伴う信仰こそ大切です」と書いている。それなのに、パウロはユダヤ人と揉めたくなかったのか、テモテに割礼を受けさせている。

創世記 17章に、神とアブラハムの間で結ばれた契約のことを記している。その 9節～11節に下記のように書かれている。「神はまた、アブラハムに言われた。『だからあなたも、わたしの契約を守りなさい、あなたも後に続く子孫も。あなたたち、およびあなたのために続く子孫と、わたしとの間で守るべき契約はこれである。すなわち、あなたたちの男子はすべて、割礼を受ける。包皮の部分を切り取りなさい。これが、わたしとあなたたちとの間の契約のしるしとなる』」。割礼は神と交わした契約のしるしであり、神の民であることの証となった。女性を排除した割礼が契約のしるし、神の民の証になった。聖書の民は男性主義であり、彼らは割礼を受けた者であることを何よりも誇りにした。パウロは、主イエスの救いにおいて、割礼の有無は関わりないと断言しているが、テモテに割礼を施している。パウロはユダヤ教徒であった時、割礼の宣教者であった。この風聞が伝えられ、間違った噂を書き残したと言う人がいる。しかし、パウロはテモテに実際に割礼を施したのではないか。「彼らは方々の町を巡回して、エルサレムの使徒と長老たちが決めた規定を守るようにと、人々に伝えた」と書かれている。「規定」とは、使徒会議で付帯事項として「偶像に献げられたものと、血と、絞め殺した動物の肉と、みだらな行いを避けることです」という「使徒教令」である。使徒教令を守りことも勧めている。

パウロは頑固な原理主義者ではなかった。周りの状況には柔軟に対応している。テモテを同行させるためには割礼を施し、周りの人々に納得させ、同意を得た方が得策であると判断したのではないか。使徒会議のユダヤ教的な「使徒教令」も勧めている。パウロの一貫しない態度を非難する人もいるが、どうしてもよいことには目くじらを立てず、福音の前進のためには柔軟に対応する態度を評価していいのではないか。